

書評

BOOK REVIEW

堀 有喜衣 著

『高校就職指導の社会学』

——「日本型」移行を再考する

尾川 満宏

1 はじめに

1980年代以降の高卒就職研究は、教育社会学を中心に、学校と企業の密接な結びつきである「実績関係」を想定しながら「学校に委ねられた職業選抜」を研究主題としてきた。この研究パラダイムは、労働市場からの要求よりも学校内のメリトクラシー原理が就職希望の高校生の選抜・配分を貫くことで円滑なジョブマッチングが実現する、それが「日本型」移行であるとの通説をともなった。しかし、就職環境が激変した1990年代から2000年代は「日本型」移行にとって受難の時代であり、高校就職指導も再考を迫られるようになった。にもかかわらず、アカデミックな関心は十分には寄せられなくなってしまった。

本書は、激変の時代をまさに若者として経験しつつ、今日まで精力的に若者の教育から職業への移行問題を論じてきた著者が、高校就職指導研究の再興を訴えたものである。著者は「はしがき」で、「従来の高卒就職指導研究は『教育の論理』だけでなく高卒労働市場の等質性をア prioriに前提し、かつ事例研究に依拠するがゆえに、日本の高校就職指導の全体像を十分に描ききらずにきた」(ii頁)と端的に述べる。そのうえで、対象を全国に広げて高校から職業への移行の全体像を示し、単一の高校就職指導像である「日本型」移行のみを提示してきた通説に修正を迫るのである。以下、本書の構成に従ってその内容を紹介しよう。

2 各章の概要

序章「高校から職業への移行研究の背景」では、高

卒就職をめぐる状況の変化が概説される。学校と労働行政の関与による「組織化された就職指導」や、「一人一社制」「推薦指定校制」および「実績関係」からなる「学校に委ねられた職業選抜」は、高卒就職の状



●ほり・ゆきえ
主任研究員
労働政策研究・研修機構

●勁草書房
2016年8月刊
A5判・240頁
本体4000円+税

況や高卒労働市場などが変化した90年代以降、デメリットを露呈し批判にさらされるようになった。2000年代後半は景気循環により求人状況や就職先に変化が見られる一方、景気の影響は地域によって異なる側面もある。しかしながら、近年の高校就職指導の全体像を捉える調査研究は十分には行われてこなかった。

第1章「先行研究の検討——高校から職業への移行研究」は、学校中心の生活から労働中心の生活への間断なき急激な変化を特徴とする日本の若者の移行をめぐって、教育社会学は高校就職指導に着目し、その特質を「実績関係」に見出してきた点を指摘する。しかし、この研究パラダイムを主導した荻谷剛彦らの議論は国際比較の視点によるもので、高卒就職の全体像を把握するには実証性に乏しく、また、90年代以降に興隆した高卒無業者研究も大都市の学校に焦点化したことで全体像を把握しなかった。企業側の視点に立てば、以前から学校との関係は安定的でも継続的でもなく高校は採用経路の一つに過ぎなかったし、また、高卒就職者の地域移動の実態からは、地方特有の移行や高校就職指導のあり様が推察される。高卒者の移行を多面的にとらえ、先行研究の限界を浮き彫りにしている。

このような先行研究の課題に対して、第2章「先行研究の課題に挑む」は、本書の分析課題を「学校に委

ねられた職業選抜」などを手がかりに高校就職指導の全体像を把握することと、地域に応じた高卒者の移行過程の相違を高校就職指導や地域労働市場との関連から明らかにすることに設定する。加えて、本書が扱う多数の調査の概要が説明され、豊富なデータにもとづく議論を予感させる。

第3章「2000年代の高校就職指導類型——『学校に委ねられた職業選抜』の現在」では、2010年に実施された全国調査から、高校就職指導が「80年代型」（学校推薦にあたり成績基準あり＋希望が重なった場合に校内選抜あり）、「準80年代型」（成績基準あり＋校内選抜なし）、「準自由形」（成績基準なし＋校内選抜あり）、「自由形」（成績基準なし＋校内選抜なし）の4つに類型化される。そのうえで、「学校に委ねられた職業選抜」とみなされる「80年代型」就職指導は全体の5分の1程度の規模にマイノリティ化しており、地域の産業構造における製造業比率が高く、県外就職率が低いような雇用情勢がよい地域にある、就職者が多い高校で成立しやすいことを明らかにした。さらに、第4章「高校就職指導の実態——インタビュー調査から」では、高校教員の就職指導観を地域の高卒労働市場と対応させながら解釈することで、学科や労働市場類型、就職者人数などの諸要因がどのように組み合わさって就職指導類型を成立させているかが説明される。

では、縮小した「80年代型」就職指導は、80年代当時どの程度の存在感を有していたのか。第5章「80年代の高校就職指導を再考する」は、天野郁夫らが行った「1983年高校調査」の個票データを再分析し、調査当時の高校就職指導の全体像に迫っている。分析の結果、当時すでに学校に職業選抜が委ねられないケースが少なくなく、またメリトクラティックな就職指導もすべての学校・学科で実施されていたわけではなかったため、高校就職指導におけるメリトクラシーは当時から限定的な、ローカルな現象だったとの結論が得られた。

以上、メリトクラティックな職業選抜の範囲の限定性と高校就職指導の多様性が示された後に、多様性の一端が地方の事例から吟味される。地域の労働市場情勢を加味しつつ各地の若者の移行過程を比較した第6章「地方における高卒者の移行過程——北海道・長

野・東京の比較から」では、地域に応じて異なる製造業および生産工程・労務職の存在感や、高卒学歴の意味および出身学科が、各地の高卒者の移行過程に影響していることが明らかになった。そのうえで、若者の移行を地域ごとに把握する必要性や、地域の状況と高卒就職指導類型との対応関係が説明される。

さらに、高卒での県外就職率が高い2県を比較した第7章「高卒就職における地域移動の現状——青森県と高知県を事例として」では、学科や男女に偏りなく地域移動が生じている青森県と、工業高校の男性による移動が活発化している高知県の差異が示される。両県の工業高校に注目してその背景を探ると、いずれも地元労働市場の狭隘化が県外就職をプッシュしているが、高卒者の地域移動は経路依存性によってパターン化されており、また移動先地域の産業構造が移動者と移動者のキャリアを規定していた。ゆえに著者は、高校生の住む「地域」が属性として地域移動を制約することをふまえた議論が必要だと述べる。

以上をふまえ、終章「本書の知見の整理と示唆」では、高校就職指導は教育と労働市場の微妙なバランスの上に成り立っており、両者の接続は地域ごとに模索せざるをえないことを指摘している。その他にも、高校就職指導の意義はメリトクラティックな選抜・配分よりも実は集団主義を通じた社会化にあることや、「80年代型」就職指導に代わる有力なモデルが現れていない今日、高校就職指導を経由し正社員になるとのメインストリームを維持しつつ、こぼれ落ちた層を労働政策によって支援することが政策的に「もっとも現実的な解」であることなどが示唆された。

3 本書の意義および知見から導かれる問い

本書は、「実績関係」や「学校に委ねられた職業選抜」という概念とともに確定したかと思われた高校就職指導の研究パラダイムを豊富なデータから実証的に再考し、高校就職指導の日本地図を描き直そうとした、全226頁ながら大作といえるだろう。「実績関係」への疑義はこれまでも提出されてきたが、そこから日本の高校就職指導の全体像を描こうと試みた点に本書の独創性が認められる。また、マクロな問題関心に対して、全国調査をはじめとする量的データのみならず、地域労働市場を中心としたメゾレベルの、また高

校現場のマイクロレベルの記述を接続させていく立論の方法も手堅い。複雑な分析手法を用いずとも十分な実証性を有しながら通説を覆そうとする本書は、後続にとって必読の書である。

知見の内容面では、日本型高校就職指導の典型とみなされてきた「80年代型」就職指導の理念型としての重要性を確認しつつ、複数の就職指導の方法が地域労働市場などと関連しながら存在してきたことを説得的に示すことで、高校就職指導と高卒者の移行経験の多様性にアプローチしていく地平を読者にひらいてくれている。とくに評者が重要と思うのは、地方に目を向け、各地の若者が経験する移行過程の背景構造に迫ろうとする著者の視点である。この視点は、移行環境の多様性を強調し、大都市の無業者研究やノンエリート研究が前提してきた正規雇用／非正規雇用というカテゴリ以外にも、記述の資源が多様であることを教えてくれる。このように、高校就職指導や若者の移行に関する研究が今後参照すべき枠組みを提示したことはもちろん、既存の事例研究を読み直し、位置づけ直すことをも可能にする点で、本書の貢献は過去と未来の両方にまたがっている。

一方、通読するなかで惹起された疑問についても披瀝しておきたい。複数の高校就職指導類型を見出した本書は、荻谷らが提示したメリトクラティックな就職指導を「80年代型」指導と同一視し、選抜・配分と社会化の順接的な関係は、以前から一部の高校で見られた現象に過ぎなかったという。この同一視の妥当性を不問に付したとして、それではしかし、1980年代に「80年代型」以外の就職指導を行った高校は、大学進学競争を降じた就職希望の生徒たちから学校生活へのコミットメントをどのように調達したのか、という疑問が生じる。あるいは当時すでに、高校生活にコミットする就職希望者はマイノリティだったのだろうか。「80年代型」や「学校主導型」の進路指導が困難な現代の高校では、メリトクラシーを漂白したような「アットホーム」な「生徒支援型」の指導で生徒をつなぎとめるケースがあるという。これと似た状況（た

例えば、竹内（1995）が1985年に「X職業高校」で観察した「教師の現地化」などが、1980年代に広範に見られたと理解してよいのか。

教育内部の論理より地域労働市場からの規定に着目する本書は、高校就職指導の意義を、メリトクラティックな選抜・配分（と社会化の結合）ではなく、集団主義を通じた社会化に見出している。この主張は、教育が労働市場に果たす役割という観点から理解できるが、上記の高校内部の秩序問題に十分な解答を与えるものではない。高校就職指導と地域労働市場の対応関係から「日本型」移行を再考するという目的に照らせば、この問いは本書の射程外である。しかし、本書が対峙する通説がこの問いを扱っていたがために、通説を相対化するには、就職指導と集団主義の関係が生徒の高校生活をいかに構成したのか、その秩序原理を説明する必要があるのではないか。この作業は、「『教育の論理』と労働市場との間の危ういバランスの上に存立する」（ii頁）高校就職指導をその両面から描いていくためにも重要と思われる。

4 おわりに

ただし、この問いは、本書の試みがあつてはじめて提起されたものであることを最後に強調しておかねばならない。本書の知見を参照しながら、さらにインテンシブに地域ごとの高卒就職や高校内部のリアリティを記述していく研究の蓄積が、今後期待されよう。高校就職指導研究の再考と再興に向けた本書の視点や論点は、どのような研究主題を触発し、またどのように鍛えられていくのか。本書を読み終えた後、これから10年、20年の研究動向に思いを馳せずにはいられない。

参考文献

竹内洋（1995）『日本のメリトクラシー——構造と心性』東京大学出版会。

おがわ・みつひろ 愛媛大学教育学部講師。教育社会学専攻。